



かまい・よしあき 神戸大卒。同大病院、公立豊岡病院(兵庫県)、済生会兵庫病院などを経て、2022年10月から倉敷成人病センターに勤務。日本小児科学会専門医。



生活環境や食生活の変化などに伴い、この数十年でアレルギー疾患の患者数が著しく増加している上、症状や原因などの多様な変化が、数年でも見られています。一方で、発症メカニズムや病態像といった研究により、新たな治療方法・薬剤などが確立されつつあります。

### ⑥ 子どものアレルギーの変化に対応

倉敷成人病センター小児科医長 鴨井 良明

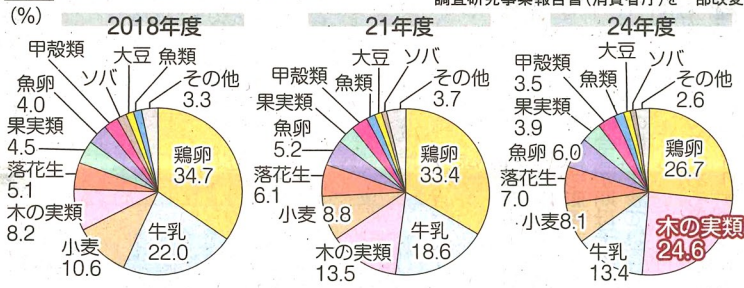
近年、新生児・乳児期の皮膚症状と食物アレルギー発症との関係について、経皮感作によるアレルギー発症経路の仮説が提示されています。荒れた皮膚から食べ物の成分が侵入し、免疫の変化を起して食物アレルギーを発症させる、というものです。アレルギーマーチを見据えた対策として、新生児期からスキンケアをすることで、アトピー性皮膚炎や食物アレルギーの発症を予防・抑制する試みが行われています。当科でも生後早期からのスキンケア指導や皮膚症状の程度・経過に合わせた治療などを提供しています。

ひとりひとり寄り添う医療を

図1 アレルギーマーチとその経過



図2 食物アレルギーの原因割合



危険性もあり、普段からの予防、そして発症時の適切な対応などを事前に確認することが重要です。

症状の現れ方についても、皮膚症状を主とする最多の即時型、運動が契機となる食物依存性運動誘発アナフィラキシーなどに加えて、乳児期後期ごろ、卵黄など原因食物の摂取2〜4時間後に嘔吐を繰り返す食物たんぱく誘発胃腸症(新生児・乳児消化管アレルギー)という病型がこの10〜20年で増加しています。従来の食物アレルギーとは症状・管理などで異なる面も多く、適切な対応が必要となります。